

胎 毒



醫學博士 瀨川昌者君講話

▲誤解せる胎毒 私が或る病家へ参りました時側へ來られた小兒さんを見ると頭部へベタ一面に腫物が出来て痂皮を冠つて居るやうな次第で御座います、尤も其時は其小兒さんが病氣だつたのではない病人は他の方でした處が其お宅の御老人が其小兒さんを抱き乍ら「御覽下さい此子は胎毒でこの通り頭部に腫物が出来て居りますが、これは治療しますと却つて悪いさうですネ、母の胎内から毒をもつてきたのですから出来る丈出来させなければなりません」と如何に腫物が増へやうが癒しては悪いと云つて出来る儘に投遣つてある、私は此の談を伺つて夫は大變なお考へ違ひですと云

つて色々胎毒と云ふ事に就いてお咄し仕たことがありました

▲民間で云ふ胎毒 民間では胎毒と云ふ事に就き右の御老人のやうに大層誤解して居られます故其事をお咄し致して置させよう先づ俗間で胎毒と云ふのは小兒の頭部とか顔面とかへ皮膚病が出来たり股間とか腋下が爛れて遂ひに膿が出たりするとか眼が赤くなつて何時もジク／＼爛れて居るとか鼻へ腫物が出来て夫れが何時迄もたゞれて居るとか爾う云ふ皮膚病は總て之れを胎毒と稱へ、之れが容易に癒らぬのは即ち母の胎内に居るとき既に毒をもつて夫れから生れたことなれば却つて之れを癒しては宜しくないと思ふ如く世間では考へて居る、併し之れが抑も大なる誤解で決して小兒が母の胎内を出るとき斯んな毒をもつて來るものではない

▲先天性の梅毒 ケレども茲に一種の毒を持つた小兒が生れることがある夫れは即ち梅毒で御座い

ます、デ先天性の梅毒を受けて居るとすれば大抵生後一週間か二週間目で徴候を發するもの、甚しきに至つては生れたとき既に此徴候の發して居るものです。斯の如き先天性の梅毒は我が國には割合に少ないのです。

▲皮膚の弱い小兒 世間で云ふ胎毒とは母親の胎内を出る時毒を脊負つて來たのだから夫れが出來る丈出來なければ癒してならぬと民間では斯んな考へを抱いて居られるが既に之れが誤解である事は前にお咄し仕て置いた通りです、元來小兒は皮膚の弱い、抵抗の弱いもので一寸した外來の掀衝でも受け易い、其内で比較的皮膚の弱い體質をもつて生れた小兒に多く腫物の出來易いのです。即ち外來の掀衝を頭部へ受けければ其處へ傷が出來て遂に痂皮になるやうな譯です、夫れであるから此胎毒は必ず十人が十人出來るものでないことは良くお解りになりませう。

▲食物の迷信 外來の刺激で皮膚の變化が起り傷

にでもなると其變化が容易に癒りません、夫れ故乳兒に斯んな腫物が出來ると先づ母親の食物に非常な注意をして、何が毒だ之れが毒だ腫物の毒になる食物を喰べれば夫れが乳汁へ出て來て容易に治療らぬと斯ん考へを抱かれます、又食物を喰べる時代の小兒になると「此の食物は腫物の毒だ、那れも毒だ」と非常に食物を嚴重にしますが何も之れが世間で云ふ程決して嚴重にすべきものではない。餘り世間では食物の禁忌を嚴重に仕過ぎます。

▲食物と病氣 總て食物は體內に於て營養になる部分は分解され營養にならぬ部分は體外へ排泄されて仕舞うのですから、食物が直接に病に影響を及ぼすものには無い、故に民間で云ふ胎毒に直接悪いと云ふ食物のあるべき筈はないのです、結局之は食物に對する一種の迷信と信するのであります。

▲香料と一般の小兒食物 併し斯んな事の例があまります小兒に餘り多く香料を與へると夫れが爲め

局部に充血を起して痛みを起さぬとも限りません  
去れど小兒は香料を好むものではない、即ち酒と

か唐辛子芥子のやうなものは一般の小兒は食べま  
せん故に腫物の出来て居る小兒として普通一般の小  
兒食物を與へて一向差支にならぬから、爾う嚴重  
に食物を禁忌するには及びません

▲胎毒と實例 民間では小兒病を胎毒と云ふ誤解  
された名稱が附けてある此胎毒の患者を連れて參  
りまして「御覽の通り此兒は頭部から面部へかけ

て腫物が出来て居りますが、ドーモ胎毒ですから  
治癒しては悪いと思ひ、出来る丈出来させて放棄  
て置く段々増る計り、尤も喰べ物は矢釜しく嚴  
重に注意をいたして此兒にも毒なものや性分の強

いものは一切喰べさせませんし、夫れに未だ私の  
乳汁を幾分か飲ませますから私迄も食物は氣を附  
けて居りましたケレども何うも段々日増しに容體  
が悪くなるやうに見えますから治癒しては悪いと  
申しますが一ツ御診察を願ひたい」と斯う云ふ事

を申して診斷を受けに參りますものが随分澤山御  
座います

四

▲食禁の弊 胎毒であるからとて腫物を治癒さな  
いで置くのは非常な誤解である小兒の皮膚に弱い  
ものは抵抗力が弱いから随つて刺激を受け易い  
で腫物も出来安い皮膚の強い弱いは其小兒の持  
つて生れた體質ですから之には據どころない事  
が胎毒であるからとて直ぐに治癒さぬのは大間違  
ひなことである此事は前にも詳しく述べて置いた通り  
です、次に所謂胎毒と食物の關係ですが之れが非  
常に誤解で小兒の食物から親の食物(まだ乳汁を  
飲む子供に對して)に迄左程嚴重な注意を拂ふ必  
要がない、斯く迄食禁を迷信して折角身體の滋養  
になるべき食物であり乍ら之れも悪い那れも悪い  
と俗間で云ふやうな食禁をしたなら却つて腫物は  
早く治らないのです凡て病氣には適當なる滋養物  
を取らなければならぬのに、世間には夫れを反對  
に考へて、滋養になるべき食物を却つて胎毒に毒

だと云つて居ます誤解もまた甚しいではありませんか、故に小兒に適當な滋養なら性分が強いので、毒だのと云はずに安心して喰べさせる事をお勧めいたすのです夫れから母親の食物が母乳に影響する事など決して懸念に及ばぬ事と斯う御承知を願ひたいのです

▲内攻と云ふ事 小兒の胎毒とは何か一種の毒を母親の胎内から受けて産れでも仕たやうに考へられて居る此事が既に誤解なるは前に詳しく述べて置いた通りで即ち黴毒の外は母の胎内から持つて生れた毒は無いと云ふ事も良くお解りになつたらうと信する、然るに茲に尙胎毒と云へる語弊に伴はれて内攻と云ふ事を世間で申されます「胎毒を癒すと内攻するとか」或は「胎毒が内攻した爲め愛兒を亡した」とか斯ういふ言葉は屢々耳にされるでありません、爾うして内攻する事を俗間では何れ程恐れて居るでせうか、併し内攻に就いては又一ツの誤解があるので夫れをお咄し仕て置く必

要があります

▲胎毒の内攻 世間で云ふ胎毒とは孰れの病症を問はず小兒の外部へ出来た皮膚病腫物類は總て之れを胎毒だと云つて居る、併し胎毒と稱するものの中には色々の病症があるので、醫師の診斷に依つて單純な皮膚病と認められたものも矢張胎毒だと稱せられ、癒しては往かぬと云つて廣がる丈廣がらして置く、之れが即ち胎毒の小兒を取扱ふに就いて世間一般の母親の考へです、ソコで斯くの如き皮膚病に胃された小兒に多くあるのは時によると全身に水腫を起して來るが、斯く水腫を起して來ると世間では夫れを胎毒が内攻したと云ふのでつまり外の病が内部へ侵入して一種異つた病を引き起すといふ意味なのです

